慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	故金原賢之助博士の生涯
Sub Title	
Author	高木, 寿一
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.3 (1959. 3) ,p.278(84)- 284(90)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19590301-0084

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

故 金原賢之助博士の生涯

高木寿一

慶応義塾大学商学部長、経済学博士、金原賢之助君は去る一月二十八日夜半に逝去された。行年、満六十一歳である。その学究生活は、慶応義塾に始まり、慶応義塾に終っている。金原博士の学問的業績は既に若い頃から学界に認められていた。その慶応義塾に対する貢献、さらに長年に亘る広い活動範囲を通じて社会各方面に於ける貢献など極めて大きいものがあった。金原博士の才幹・学殖・識見が極めて高く評価されていたことは衆知の事実である。その逝去は慶応義塾の重大な損失であるばかりでなく、広く社会の損失である。われわれの痛恨は申すまでもない。

金原賢之助博士の死を惜しみ追憶のことばを承わりたい方々は、慶応義塾関係者ばかりでなく各方面に極めて多いのであるが、逝去して未だ日が浅いので、いまはその余裕がない。ここに一月三十一日、金原博士の葬儀に際して、奥井塾長が霊前で述べられた弔詞がある。

「慶応義塾大学商学部長、慶応義塾理事、金原賢之助君は去る一月二十八日午後十一時五十九分逝去せられました。発病以来一ヵ年に亘る療養も遂にその甲斐なく、ここに到りましたことは痛恨の極みであります。

君は慶応義塾に職を奉じて以来、四十年に近く、尚お義塾のために為すところ多きを期待したに拘わらず、私たちは此度の訃に会うに到ったのであります。

君は明治三十年静岡県浜松市に生れ、浜松商業学校を卒業の後、志を立てて慶応義塾大学理財科に入学し、学生時代に既に秀才の名をほしいままにして、大正十年三月卒業されるとともに、理財科助手として本塾に残り、ここに学究生活の生涯を定めたのであります。在学中は高橋誠一郎教授の研究会にありましたが、卒業後は金融経済学の研鑽に専念し、大正十四年九月に欧米留学を命ぜられ、帰朝後、昭和四年経済学部教授に任ぜられました。君の好学の精神と研究の精緻は直ちにその頭角を現わし、学界に君の存在を高からしめたのであります。さらに金融・財政・商工等々の実際問題についても、政府機関・民間諸団体に招かれて、その達識を求められたばかりでなく、学術研究・文教政策等についても参与して、尽力するところが極めて多かったのであります。また推されて東京市会議員―都会議員として都政に参劃されたこともありますが、君の生涯は学究として専念されたのでありまして、君自身もそれを本望と考えておられたと思います。昭和十二年「世界経済の動向と金本位制度」の論文を以て経済学博士の称号を得られました。昭和二十一年より経済学部長の要職にあり、その間、本塾大学通信教育課程の創始など、戦後の学園復興への寄与は多大でありました。二十六年には義塾常任理事に就任して義塾経営の中枢に任じましたが、君の才幹は、渉外事務を担当して塾員組織の再編成ならびに創立百年記念事業の企劃に遺憾なく発揮されました。三十一年四月再び教授職に戻りましたが、商学部設置の議が起るとともに、その準備委員長として君の持つ影響力は余すところなく示され、翌年その発足とともに初代学部長に任じ今日に到ったのであります。その間、ハアバード経営学講座の開設に当り、また三十二年にはハアバード大学との交流をはかるため渡米して接衝に当るなど、本塾のためにはかった活動は真に感謝に堪えません。更に本塾体育会馬術部部長として、昭和三年以来三十年に亘り指導に当られ、同部をして名誉ある伝統を築かしめたのであります。

教室に於ける指導はよく学生の信望を集め、君の俳号にちなむ千舟会は、三十数年に亘る門下生を今も尚お数多く

集めて居ります。交友もまた極めて多く、常に君の周囲には数多い友人を持つということ、これ全く君の徳の致すところでありましょう。人に接して温仁にして明朗、正に異才たるにふさわしかったのであります。義塾を思うの念厚く、昨秋百年記念式典には病をおして参列され、その喜びに満ちた姿は今も私たちの眼に残って居ります。

商学部が発足して漸く第三年に当り、慶応義塾新世紀の再出発に際して、塾の内外極めて多事であります。この時に当って君を喪うは誠に一大損失であるとともに恨切の念の大なるものがあります。

今日の葬儀に臨んで、ひたすらに君の冥福を祈るとともに、御遺族の幸を念ずるのみであります。

昭和三十四年一月三十一日、慶応義塾長　奥井復太郎」

この弔詞を奥井塾長が静かに心をこめて読み進んで行くにつれて、私は落涙を禁ずることができなかった。大正五年に理財科に入学し大正十年に卒業した同期生であり、殊に親しい交遊を続けた一人として、金原君が逝くなってからの日々、たまたま閑かな時があれば長い生涯の一こま一こまを思い浮べる。懐しさも亦ひとしおである。同期生の中でも、殊に金原君とは塾に入学以来同じクラスに属して親交を続けてきた町田義一郎君と、亡友を語る日が多い。いま追悼の文を書こうとしても、感慨交々に迫って筆が進まず、空しく数夜をすごしている。何よりも思い懐しむことは、金原君との交遊の楽しかったことであり、彼が友情に厚かったことである。私は常にこのことを思い出しては感謝している。四十余年の親しい生涯の友―常に兄事していた友を失って、心のどこかが脱け落ちたような―心の支柱の一を失ったような淋しさを感ずる。

金原君が大正十年理財科卒業生の最優秀の学生であったことについては、同期生一同が等しく認めている。理財学会に於ても中心となって活動をした。高橋誠一郎先生の研究会に於て指導を受け、大部の卒業論文を提出した。ボエム・バアヴェルクとクラークの資本概念論争を中心とする研究であったと記憶する。堀江帰一、気賀勘重両先生はじめ理財科の諸先生は金原賢之助という優れた学生がいることをよく知って居られた。卒業前の最後の暑中休暇に大阪および東京毎日新聞社の依嘱による労働事情の調査に参加し、その報告が実に立派なものであったという。そのことが起因であったろうか、堀江帰一先生から大阪毎日新聞社が全く異例な厚遇の条件をもって君を招聘したいと云っているが、どうするかというお話しがあった。

それぞれの人の生涯には時に重大な岐路があるもののように思う。この手厚い招聘は金原君にとって一の岐路であったのではなかろうか。若しこの招聘を受諾すれば、彼は必ず新聞界の第一流の人となったであろう。しかし金原君は堀江先生の御厚意を感謝しつつ辞退して、学究生活に進む決心を貫いたのである。私は後年に金原君からその時の経緯を聞き、彼の学問研究への情熱と決心がいかに強かったかを知った。義塾に残った金原君の研究の成果―業績は、ボエム・バアヴェルクとクラークの論争を課題とする論文を始めとして三田学会雑誌に発表された。精力的に研究が進められ、その業績は学界の注目を集めることになった。

三田学会雑誌に発表された論文のほか、大正十四年九月（一九二五年）に留学生として欧州に派遣されるまでの間に、ベルンシュタインの名著「社会主義の諸前提と社会民主党の任務」を全訳して、「マルクシズム批判」と題して公刊した。小泉信三先生が長文の序を寄せられている。いま三十数年を隔ててこの書物を開いて見ると、訳文極めて明快であり、若き日の金原君の学問精進が偲ばれる。この訳書は今日に於てもなお屢々引用されて居る。

金原君は長身ではないが筋骨引き締り、気力が横溢して、さっ爽たるものがあった。慶応義塾の関係者以外にも若い頃の金原君を知り、いまも懐しみを持って逝去を惜しむ人々も多い。過日、私はその一人である早稲田大学の阿部

賢一博士から「私は若い頃の金原さんをよく知っています。キリッとした立派な青年学者で、実にさっ爽としたものでした。惜しい人をなくしました」と云われた。

金原君は健康に恵まれて、疲れを知らない人であった。その生涯に病気らしい病気をしたのは僅か二度しかない。一度は大正十二年春のことであったと記憶するが、腸チブスに冒されて、芝白金の伝染病研究所に入院したことがある。見舞に行った私に、痩せ細っていながら「僕はチブスなんかで死ぬもんか」と意気頗る旺盛であった。それから三十数年の間は病気をしたことがなく、二度目の病気で世を去ったのである。

二ヵ年半の欧米留学を終えて、昭和三年四月に帰国してから、極めて活潑な研究活動と塾外の活動が始まった。別表の著作目録を見れば金原君の学問的業績の豊富なことを知るであろう。三田学会雑誌そのほかに多数の論文を発表している。昭和六年に刊行したミュラアの「為替相場と物価」の訳書から、年々著書・訳書が公刊されている。昭和九年二月に「世界経済の動向と金本位制度」を公刊した。私はこの書は金原君が当時確に自信を持っていた著書であり、且つこの書は既に高く評価されていた金原君の金融経済学者としての名声を確立したものであると思う。この書物には若い学徒の意気が充溢していることを感ずる。

この書の扉には「この小著を 恩師 故堀江帰一博士の霊に捧ぐ」と記されてある。金原君に深く嘱望して居られた堀江先生は、金原君が留学中に急逝された。堀江先生の厚情に感謝していた金原教授は、この書に確信を持つからこそ恩師の霊に捧げたのであると思う。そしてこの「世界経済の動向と金本位制度」によって経済学博士の称号を授与されることになった。金原教授の塾外に於ける活動もこの頃からますます活潑になった。

当時の金原君を回顧すれば、その学問に対する倦むことなく続けられた精進と活動とは、あれでよく体が続くものだと思うほどであった。毎日深更―黎明に到るまで読書し思索し、健筆を揮って研究の成果を発表した。また求められれば遅滞なく明快に達識な意見を開陳した。金原君に対する諸方面の信頼は一層高められて行った。

昭和七年末からは財団法人金融研究会の調査研究事業の中心として活動したが、その後に、切に求められて参劃した政府および民間の機関は極めて多い。政府機関では、例えば内閣臨時資金調査委員会、中央物価委員会、通貨安定対策本部委員会、学術研究会議委員、大学設置審議会委員その他の委員となった。大蔵大臣および商工大臣などから個人的に意見を求められることも多かったと聞いている。民間機関では日本商工会議所および東京商工会議所その他の多くの団体の委員または参与などを依嘱されている。

学術団体では特に日本金融学会に関与し参劃するところが多かったし、日本経済政策学会そのほかの学会の理事および委員であった。従って金融学界そのほかの学者との交りは極めて広かった。金原君が関与した政府機関および民間団体は極めて多く、いまここに枚挙に遑がないほどである。

昭和十七年には東京世田ヶ谷区の地元の人々の切なる推挙を拒み難く、また先輩の奨めもあって、東京市会議員に、続いて都会議員に立候補することになったが、その選挙では最高点で当選して、昭和二十二年まで都政に参劃した。その後、両三度か、東京および郷里静岡県で国会議員となることを熱心に推挙されたと聞いている。若し金原君にその意さえあれば、彼の豊かな才幹と学識をもって、必ず卓れた政治家となったであろう。彼はひとたび決心すれば、必ず最大の結果をもって事を為し遂げる人であったからである。しかし金原君は、塾長の弔詞にもあるように、学究としての生涯を続けることを本望として、政治家への途を選ばなかった。

終戦後は、経済学部長として、続いて常任理事として、義塾の復興に尽力した功績は大きい。このことは奥井塾長

の弔詞のうちによく述べられている。通信教育部の創設、さらに商学部の創設などそのほか、義塾の新しい企画とその実現については、欠くことのできない人物であった。彼の創意と熟慮と適確な判断、さらに計画の円滑な実現の過程に於ける努力と忍耐等々は、なかなか他の及び得るところでない。金原君を知る人は、彼に事を託すれば、必ず円滑に且つ完璧に成し遂げてくれるという信頼を持っていた。

慶応義塾が新しい段階に進むに当って、金原君に期待するところが多かったし、彼もまた自己の生涯のすべてを義塾に捧げることを本懐としていた。商学部の創設には中心となって尽力したのであるから、せめて第一回の卒業生を出すまではとも思ったであろうし、そのほか、まだまだやりたいと思うこともあったろう。昨年二月中旬慶応病院の病床に臥してから一年、殊に金原君は不治の病（癌）であることをよく知っていたのであるから、心の苦しみも強かったろう。さぞ残念であったろうと思う。昨秋、小康を得て、義塾創立百年式典に列席したが、人目には元気そうにも見え、努めて常のように穏かな微笑を示していたが、内奥にははげしい精神的苦闘に悩んでいたのではないか。壮重・厳粛な式典の進行を見つめ、心に刻みつけながら、不治の病を思って暗涙をのんでいたのではなかろうか。

本年一月に入って病状が進み、癌研究所附属病院に入院した。自分の病気のことを余りにもよく知っているのであるから、見舞のことばにも困るので、若い友人から聞いた話などをしたら、おかしそうにかすかに微笑していた。彼の病苦を一瞬でも和らげることができたとすれば、せめてもの慰めに思う。その時、金原君は「ぐずぐずしているうちにひどく衰弱してしまった。てん滴の時など一時間から一時間半かかるので退屈する。気分は非常によい。ただ今日のように輸血すると三十七度五・六分になる」と書いた紙片を私に渡した。これが私にとって金原君の絶筆になった。それから五日後の一月二十八日夜に病状が急変して、満六十一歳二ヵ月の生涯を終ったのである。

故　金原賢之助博士主要著訳書

E・ベルンシュタイン著　マルクスシズム批判（訳）　岩波書店　大正14
国際金融総論（世界経済問題叢書1）同文館　昭和6
F・ミュラア著　為替相場と物価　同文館　昭和6
金の問題　春秋社　昭和7
金本位制度の動揺と存続性　東洋経済社編　昭和7
フィシャー著　アメリカ株式恐慌とその後の発展（小高泰雄共訳）　同文館　昭和7
貨幣制度の動向と本位政策上の若干の問題　春秋社　昭和8
為替政策　春秋社　昭和8
国際資本及び金融争覇戦　春秋社　昭和8
国際貸借の現状　春秋社　昭和8
貨幣の実際　非凡社（実用経済講座第一巻）　昭和9
外国為替・金・銀　東洋出版社　昭和9
世界経済の動向と金本位制度　巌松堂　昭和9
世界貨幣制度上の若干問題　改造社　昭和10
貨幣ブロックに関する諸問題　東京銀行集会所　昭和10
為替相場及び為替政策　非凡社（実用経済講座第九巻）　昭和10
S・E・トーマス著　産業金融論（門脇良教共訳）　同文館　昭和10
A・フィシャー著　貨幣の購買力（高城仙次郎共訳）　改造社　昭和10
銀行実務法規解説　非凡閣　昭和11
金・貨幣の若干の問題　巌松堂　昭和11
通貨政策と世界経済　言海書房（「国際経済研究第一報」収録）　昭和11
戦時経済と資金統制・金政策の発展と動向　時潮社　昭和12
戦争と財政金融　財政金融研究会　昭和12
金融論講義案　昭和12
金融論　第一・二・三号　慶応出版社（慶応義塾大学講座経済学）　昭和12～14
欧州経済の危機　日本青年外交協会　昭和13
金融の常識　千倉書房（商業常識講座）　昭和13
金融統制と貿易政策（浜田恒一共著）　改造社　昭和13
資本輸出　改造社　昭和13
国防経済論　日本評論社　昭和13
戦時経済と銀行　全国地方銀行協会　昭和13
日本戦時物価政策論　千倉書房　昭和13
インフレーションと国防経済（荒木光太郎編「インフレーション」収録）　日本評論社　昭和13
北支における貨幣金融問題（国際経済学会編「北支経済の根本問